

落語の歴史的特性と仙台市に開業した 常設寄席の立地要因

中 野 伸*

キーワード 落語 寄席 お笑い 娯楽 商業地

第Ⅰ章 はじめに

わが国における娯楽施設は戦前まで劇場、演芸場、芝居小屋、映画館等の観劇・鑑賞が多く、高度経済成長期を経て庶民の所得の向上と価値観の多様化により屋外レジャーやスポーツ体験型へと娯楽は幅を広げた。現在ではさらにテレビゲームやスマートフォンの出現により個人で楽しむ娯楽も定着してきている(三浦, 2015)。娯楽は楽しいもので笑いを生み出す。医学の視点から井上(2006)は、笑うと元気が回復し、笑うことによって心が無になり心のゆとりをもたらすと指摘した。中島(2008)は笑いがストレスから身を守るための生体防御機構であり、笑いが身体に好影響を与えることに触れた。大衆文化論の視点から山本(1978)は、娯楽は人間の精神に好影響を与えると指摘している。さらに中島(1997)も、笑いが身体への健康に加えて精神面の健康にリラックス効果など重要な役割を果たすと指摘している。社会学的視点から木村(1989)は、人間は祭りや娯楽により日常生活から脱却し、楽しみ笑うことで集団として一体化し、生への活力を取り戻すと指摘している。これらの研究から娯楽や娯楽における笑いは、個人としては身体や精神の健康を向上させ、それが人間集団としての活動に好影響をもたらすことが明らかになっている。

一方でわが国では、高齢化が進展し続け2018年の高齢化率は28.1%であり、宮城県の高齢化率も26.9%で高齢化社会はますます進展している(図1)。

鈴木(1996)は経済学の視点から落語が聴覚や視力が弱った高齢者も楽しむことができる娯楽産業に有効であると指摘した。さらに、高齢者の都心回帰がすすみ、都市に居住する高齢者のQOLを高める趣味や娯楽等の「生きがい」づくりが重要であり(笹川, 2004)、高齢社会において高齢者を対象とした盛り場形成が高齢者の外出を促すと中鉢(1998)は地理

* 東北学院大学教養学部 2019 年度卒業生
テーマ：地域の経済と文化
指導教員：岩動志乃夫

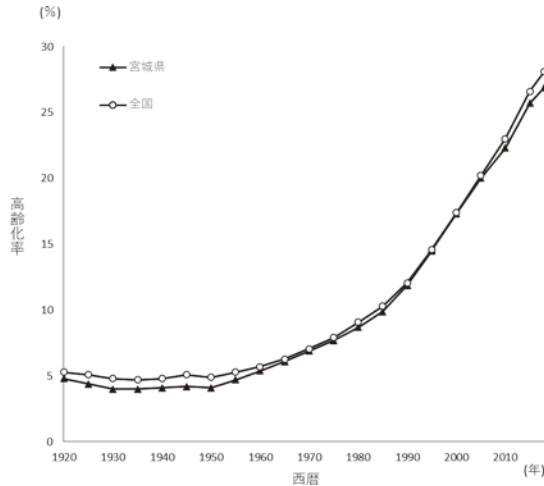


図1 宮城県と全国の高齢化率の変遷
 総務省統計局『国勢調査』, 内閣府 (2019) より作成

学の視点から示唆している。

2018年4月、仙台市青葉区一番町四丁目に定席寄席であるH座が開業した¹⁾。これまでの定席寄席は東京、大阪、名古屋を中心する三大都市圏に立地してきたが、地方都市である仙台市への立地は異例である。この定席寄席の開業は、同市中心商業地の活性化のみならず、高齢化に対応したアメニティに富む魅力的な中心街の一指針を見出すことにも結び付くと考える。そこで本研究では、三大都市圏にしか立地しえなかった定席寄席が広域中心都市である仙台市中心部へ開業したことに着目し、出演する落語家の公演スケジュールを明らかにするとともに同市にお笑い文化施設が開業した立地要因を明らかにすることを目的とする。また本稿の対象地域は、定席寄席が立地する仙台市中心商店街界隈とする。

本研究の研究方法は、先行研究にもとづいて娯楽や落語に関する歴史を整理し、統計データを用いて娯楽施設の立地変化を追った。H座に出演する落語家の出演スケジュールに関しては、公益社団法人落語芸術協会 (以下、協会と称す) の公式ウェブサイト²⁾の公演スケジュールおよび協会員プロフィールを基に移動を調べ、仙台の定席寄席開業までのプロセスは、2019年8月～9月にかけてH座席亭S氏への聞き取り調査を実施した。さらに来館者を対象としたアンケート調査を同年9月21日～30日にかけて実施し、300票配布し、262票の有効回答を得た。

第II章 わが国における娯楽について

第1節 見る・聞く娯楽の歴史

(1) 寄席

明治期より寄席は庶民を魅了する一大娯楽文化であり、日常空間から離れたところに成立するとされ、さらにそれより前の江戸時代には神社仏閣の境内やその近辺を盛り場とし寄席は立地していたとされる(山本, 1978)。明治時代になると寄席は街中心部の施設で展開されるようになった。定席寄席の栄枯盛衰は激しく、当初は寄席の演目は明確化されていたが、明治末期には演目が混在するようになった。寄席での演目には義太夫、講談、浪花節等があり江戸期に盛んになったとされる。

(2) 芝居小屋

寄席が安価な娯楽であるのに対して芝居小屋は高級な娯楽であったとされる(山本, 1978)。芝居が指すものは歌舞伎であり、大芝居は一般庶民にはたいへん高価な価格帯であった。娯楽の乏しい時代に小芝居は一般庶民にも親しまれた。明治初期には芝居は大劇場を指していたが、明治20年代に大劇場、小劇場の区別がなされ、小劇場では政治闘争を荒々しい演技でみせる壮士芝居や壮士芝居から発展した新派劇が一般庶民に大好評を博した。寄席は男性の娯楽という認識だったが、芝居小屋は女性や子供を対象とした娯楽であった。そのため芝居小屋は道徳を養う教育空間という側面も担った。

(3) 映画

映画は寄席や芝居小屋に大打撃を与え一般庶民の娯楽の転換期をもたらした。明治30年代に好評を博した活動写真が映画のはじまりである。活動写真は音声がなく非常に短い映像で活動弁士とよばれる解説役を介して楽しむコンテンツであった。しかし、当時の人々にとって写真が動いているように見える映像は大変な衝撃だった。そして、入場料も比較的安価であり、寄席や芝居小屋の伝統的娯楽を凌ぐ大衆娯楽として親しまれた。さらに、昭和初期に音声付きのトーキーが出現し、国産の作品も創作されるようになり、より大衆から受け入れられるようになった。加えて映画は同空間内で同質で楽しめる特性を有しているため、大衆は映画を鑑賞する際、気軽に楽しめる娯楽として認識され、大衆映画に対する認識とニーズの高まりが、寄席と芝居小屋のニーズの低下と衰退をもたらしたのであろう。

(4) ラジオ

後述の落語を含め、これまでの娯楽のほとんどは「聞く」ことであった。「聞く」ニーズを飲み込んだメディアがラジオである。浪花節、落語、講談など繰り返し放送され視聴者に飽きられやすい内容は、視聴者から新作を集め最も人気のある部分を切り抜くなど、ラジオの特性を活かして伝統的娯楽は放送された。

(5) テレビ

映画が満たした見る欲求とラジオが満たした聞く欲求のどちらもテレビが踏襲していった。テレビが時代劇、ドラマ、漫才や落語を含むバラエティ、連続ドラマを放送したためである。また、相撲や野球、プロレスの実況中継を通したスポーツ観戦が大衆に与えるスケールや躍動感は寄席や芝居小屋とはかけ離れたものであったに違いない。テレビの出現は、大衆が寄席や芝居小屋に観客として直接娯楽を享受するという行為そのものに根底的な変化をもたらしたのであろう。しかし一方では人気テレビ番組の「笑点」³⁾は大衆に落語家の存在を認識させ、お笑い文化を大衆が楽しむために大いに貢献している。

第2節 落語の歴史

(1) 江戸時代までの落語

秋羽(1994)によれば落語の背景は仏教の教義を庶民に広げる僧侶の説教を源流にしているという。中世には説教にオチをつけて話始めたのが「御伽衆」の安楽庵策伝である⁴⁾。落語というジャンルとして確立する以前、1677年に露の五郎兵衛が京都で辻噺⁵⁾をはじめたとされ(表1)、1680年には鹿野武左衛門が座敷噺を始めた。武左衛門の座敷噺は江戸の芝居小屋や風呂屋で披露され好評を博した。これが江戸落語のはじまりであり、武左衛門は「江戸落語の祖」と呼ばれる。

一方上方では1684年、初代米沢彦八が大坂生玉社の境内などで辻噺が始まったとされる。1786年に「江戸落語中興の祖」とされる烏亭焉馬が噺の会を催した。烏亭焉馬の活躍と並行するように、大阪では初代桂文治が寄席を定席で催すようになった。噺の会や寄席定席は好評を博し、上流階級のスポンサーを得て職業落語家が活躍する土壌が作り出されるようになった。

定席寄席は1700年代末には東西で寄席が盛んになり、三笑亭可楽が落語家として生計を立てる地位を確立し、職業としての落語が始まったとされる。しかしながら、落語内で幕府に対する風刺を行ったり、鳴り物入りの落語が風紀を乱すとして、江戸幕府による弾圧が繰り返されるようになった。橘(2007)によれば寄席は1804年に江戸の街中で33軒から

表1 落語の歴史

西暦	できごと	寄席の軒数
1677	霞の五郎兵衛、京都の東山真葛が原で辻噺をはじめ。	
1680	鹿野武左衛門が江戸にて座敷噺を始める。	
1684	初代米沢彦八が大飯生玉社の境内などで辻噺をはじめ。	
1786	江戸落語中興の祖である烏亭焉馬、向島の武蔵屋敷三方にて最初の噺の会を催す。	
1797	三遊亭猿松が鳴物入り芝居噺をはじめ。	
1798	辻噺や会噺の時代の終焉、東西どちらも寄席噺の時代に。神田豊島町薬店で寄席興業始まる。下谷稻荷神社で初のプロ落語家三笑亭可楽誕生。	
1804		江戸：33軒
1809	船遊亭犀橋、音曲噺で売り出す。	
1815		江戸：76軒
1825		江戸：約130軒
1842	天保の改革で江戸市中の新規寄席取り潰し、古席のみ存続を許可。	江戸：15軒
1844		江戸：66軒
1855	落語の天才と評される円朝「三遊亭円朝」を名乗り、真打昇進。江戸の寄席数、「一町内に一軒」と呼ばれるほどの大盛況。	江戸：軍談220軒 江戸：落語173軒
1869	寄席取締りに関する布告、「市中寄席の儀は、爾來軍書講談昔噺に限り」となる。	
1872	尊王思想を主とする「三条の教憲」、噺家にも普及協力を要請、三遊亭円朝、扇子一本の素噺に専念するように。	
1876		東京都：126軒
1879	東京の色物席数171軒。	
1880	上方において、落語家数142名、席亭の主たるもの大阪15軒。	
1890	劇場取締規則により劇場を大小に分け、見世物小屋として扱われた芝居小屋が小劇場に認定。	
1903	東京市内の寄席数110軒、日本初の映画常設館「電気館」開館。	
1904	日露戦争がはじまり、戦争のため寄席は甚だしく不景気。	
1914	吉本興業部、文芸館を花月亭と改め吉本派を組織、色物中心の興業を開始。	
1922	吉本が東京、京都、神戸へ進出、30近い寄席を所有。	
1923	関東大震災、東京の寄席の三分の二が消失。	東京都：34軒
1924		東京都：48軒
1929	浅草オペラに代わり、カジノ・フォーリーの時代に、エロ・グロ・ナンセンスの歌と踊りと芝居、大衆に受け入れられてエノケン時代。	
1931	大阪落語の凋落、「大阪落語保存会」が発足。神田立花亭で開催された第41回落語研究会がNHKラジオで初寄席中継として放送。ラジオ放送のプログラムに入り、落語の放送がある晩は寄席に大打撃。	
1933	寄席演芸場不景気で減少。	
1934	三越ホールで一流芸人出演の上流向きの演芸会開催、ホール落語のさきがけに。	
1945	第二次世界大戦による空襲で寄席の多くが焼失。	東京都：18→1軒 大阪府：数十軒が半数消失
1948		東京都：9軒

西暦	できごと	寄席の軒数
1953	放送ブーム、ラジオ、テレビともに落語家多数出演。	東京都：11 軒 愛知県：1 軒 大阪府：1 軒 神奈川県：1 軒 兵庫県：1 軒 宮城県：1 軒
1950 年代	人口増加と近郊への人口拡散、交通網の整備、ターミナル駅の充実により寄席減少、ターミナル駅に演芸場が立地するようになる。定席ではなく交通の便が良い場所に即席の高座を設けた単発興業のホール落語にニーズが増える。	
1960 年代	ホール落語の全盛期、創作落語が若いサラリーマンに人気になる放送メディアの台頭、ホール落語の流行で寄席ニーズの低下に拍車がかかる状況で、東京、大阪等の大都市の地価上昇。立地条件の変容が進み、定席の経営をひっ迫、定席が消えるようになる。娯楽の関心が、映画、テレビ、スポーツへ移行する。	
1970 年代	漫オブーム、落語はブームにのりきれず。	
1990	上方落語家連により「彦八まつり」を各年開催開始、盛況を誇る。	
1995	柳家小さん、桂米朝が人間国宝になり、伝統芸能としての落語という認識が浸透する。	
2001	古今亭志ん朝が亡くなりメディアに大きく取り上げられる。	
2002	「横浜にぎわい座」オープンする。	
2003	春風亭小朝（落語協会）を中心として、笑福亭鶴瓶（上方落語協会）、立川志の輔（落語立川流）、春風卒昇太（落語芸術協会）、柳家花緑（落語協会）、林家こぶ平（落語協会）をメンバーとして団体の枠を超えた「六人の会」が結成。また小朝により「東西落語研鑽会」が始まる。	
2005	落語ブーム、TV 番組「タイガーアンドドラゴン」が人気を博す。	
2006	「天満天神繁昌亭」が大阪府大阪市でオープンする。	
2017	「喜楽館」が兵庫県神戸市でオープンする。	
2018	「H 座」が宮城県仙台市でオープンする。	

橘（2007）、三浦（2015）、広瀬（2020）より作成

1825 年には 130 軒に増加を続けたが、天保の改革によって演目の制限がかけられ 1842 年には 15 軒まで減少してしまったという。しかし、1855 年には落語の天才と称される三遊亭円朝が真打昇進、「一町内に寄席一軒」と呼ばれるほど寄席は盛況を取り戻していった。橘（2007）によると鑑賞料である木戸銭が 48 文であり、歌舞伎の大衆席が 130 文であったことから非常に大衆的であると指摘している。

(2) 戦前までの落語と定席寄席

明治期に入ると落語は弾圧にさらされ、1869 年に「寄席取締りに関する布告」によって寄席における落語上演が禁止され、1872 年には「三条の教憲」によって落語の演目が絞られた。鳴り物入りの派手な演出が弾圧対象となる世相を受けて円朝は扇子一本で落語を演じ

るようになった。これが江戸落語のスタイルとして継承されている。

1876年東京市内の寄席は126軒であったが、その後は減少傾向となった（橘，2007）。1903年に常設映画館である電気館が開業した際に、寄席は110軒と減少してしまった（橘，2007）。最も大きな打撃をあたえたのは1923年の関東大震災である。関東大震災直後寄席は34軒まで激減し、東京に立地する寄席の3分の2が失われてしまった（橘，2007）。この頃ラジオ放送で落語を放送する機会が増え、集客が減った寄席は閉業に追い込まれていった。また、ホール寄席が1933年に開催され、寄席における落語鑑賞のニーズは次第に減少していった。

(3) 戦後から現在までの落語と定席寄席

第二次世界大戦直前に東京都内に18軒あった東京都内の寄席は、戦火により1945年には1軒を残すのみになってしまった（橘，2007）。1948年には9軒まで復興を遂げるが、寄席の苦境に立たされた状況に変わりはない（橘，2007）（表1）。その後テレビの登場とそれに伴う1953年の放送ブームにより、テレビとラジオに落語家が出演するようになり、大衆は落語をテレビやラジオで楽しむようになった。高度経済成長期に入り、近郊への人口拡散が進み、交通網の整備とターミナル駅の充実が図られようになると、ターミナル駅に演芸場が立地するようになった。定席ではなく交通の便が良い場所に即席の高座を設けた単発興業のホール落語にニーズが増えていった。

1960年代になると、ホール落語は全盛期となり、創作落語が若いサラリーマンに人気になっていった。ホール落語の流行と放送メディアの台頭で寄席ニーズの低下に拍車がかかった。さらに、東京、大阪等の大都市の地価上昇に伴い、立地条件の変容が進み、定席の経営をひっ迫し、廃業に追い込まれる定席も出現する。つまり大衆がもつ娯楽の関心が映画、テレビ、スポーツ鑑賞等へと多様化し、寄席で公演される落語は大衆から娯楽として選択される機会を失ってしまった。

1995年に柳家小さんと桂米朝が人間国宝になり、伝統芸能として落語の重要性が再確認され、落語は守るべき伝統文化として改めて認識される契機となった。また、2000年代に入る前、多数のメディアに出演した立川談志と全落語会平成期の至宝と称される古今亭志ん朝が活躍し、大衆が落語をさらに支持するようになり、落語ブームが起こったとされる。

2000年代に入ると三大都市圏に定席寄席が開業するようになる。2006年大阪市に「天満天神繁昌亭」が、2017年には「喜楽館」が神戸市に開業した。そして2018年三大都市圏以外では初めて宮城県仙台市にH座が開業した（表1）。この相次ぐ開業ラッシュは、落語家と聴衆が同じ場所で笑いを楽しむ落語本来の特性が見直されていることを示しているといえ

よう。しかし三大都市圏以外の常設寄席の開業は近年初めてであり、極めて異例であるがこれについては後述する。

第III章 わが国における娯楽施設の立地特性

第1節 現在の寄席の立地特性

現在、寄席が立地する都道府県は、東京都51軒、神奈川県4軒、大阪府3軒、愛知県2軒、兵庫県1軒、福岡県1軒、宮城県1軒である（図2）。

このことから、現在の寄席が立地する都道府県の特性として、東京、大阪、名古屋の三大都市圏、および福岡市、仙台市の広域中心都市である。寄席の集積においては、東京都の51軒が他都道府県より極めて多く、以下東京都に隣接する横浜市が4軒、大阪府は3軒の順である。関西には神戸市にも1軒の立地がある。名古屋市は2軒であり、三大都市圏における寄席の集積においては東京都と大阪府よりも少ない。他は福岡市と仙台市のみに寄席が1軒ずつ集積している。

次に、現在の寄席の分類から立地特性を明らかにする。寄席の分類には、定席寄席、寄席処、その他の寄席大きく分けて3種類に分類できる。定席寄席はほぼ年間にわたり定休日以外には開演する施設である。寄席処は寄席の機能を有する施設であるが、年間を通じて毎日営業する施設ではなく、月単位あるいは月内で開演回数や不定期開演をする特徴を有した施設

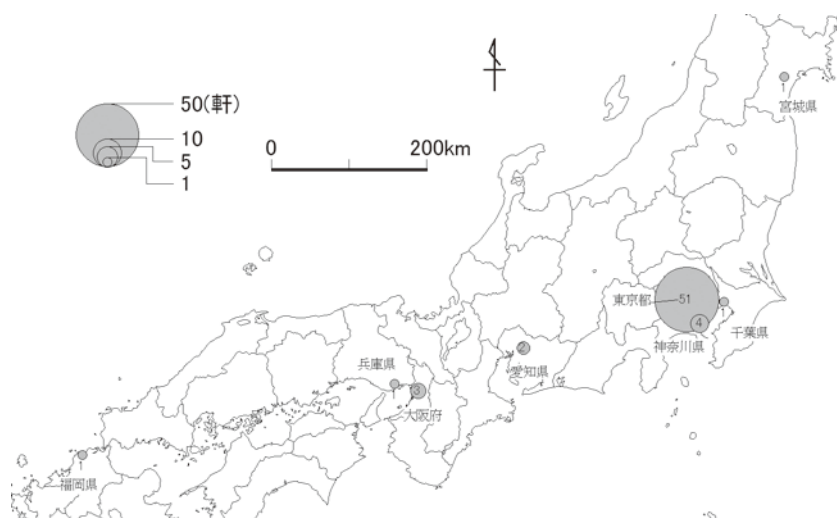


図2 現在の寄席の軒数
井澤（2018）より作成

である。その他の寄席は、定席寄席や寄席処のような落語のみを公演する施設ではなく、飲食店や書店にあるホール等で不定期に開催する施設であり、落語以外の公演も行う施設をいう。

定席寄席の立地は、東京5軒、大阪市、名古屋市、神戸市、仙台市の各1軒である⁶⁾(図3)。首都圏の定席寄席は東京の5軒が全国的にみても多く、関西圏には大阪市と神戸市の計2軒である。仙台市の1軒は三大都市圏に定席が立地する特徴と異なり、同市に開業したH座は定席において特異な立地特性を有するものとして注目される。

寄席処の立地特性は、東京9軒、大阪市1軒、横浜市1軒であった(図4)。

首都圏には横浜市にも寄席の施設立地の立地が認められた。

その他の寄席の立地特性として、東京都37軒、神奈川県3軒、千葉県1軒、大阪府1軒、愛知県1軒、福岡県1軒であった(図5)。東京都に隣接する神奈川県3軒、千葉県1軒は首都圏に位置する立地である。その他の寄席の立地特性は東京都、大阪府、愛知県の三大都市圏を中心として立地する特性を指摘することができる。しかし、その他の寄席が立地する福岡市は九州一の人口を有し、九州各地から集客可能な立地であろう。

さて寄席施設の3分類のうち定席寄席の立地が見られるのは三大都市圏以外では、仙台市のみである(図3)。以上述べてきたように仙台に立地する寄席の特徴は定席寄席であり、年間を通じて興行を可能とする立地特性を有している。人口集積や集客の点では福岡市が仙台よりも優位であり、福岡市に定席寄席がみられず、同じ広域中心都市とされる札幌市や広

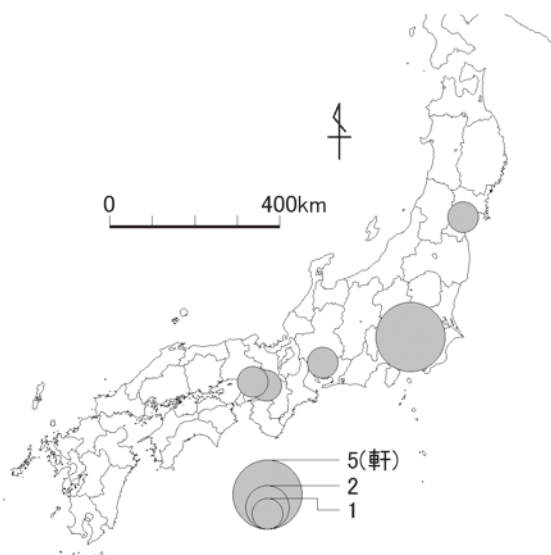


図3 定席寄席の軒数
井澤(2018)より作成

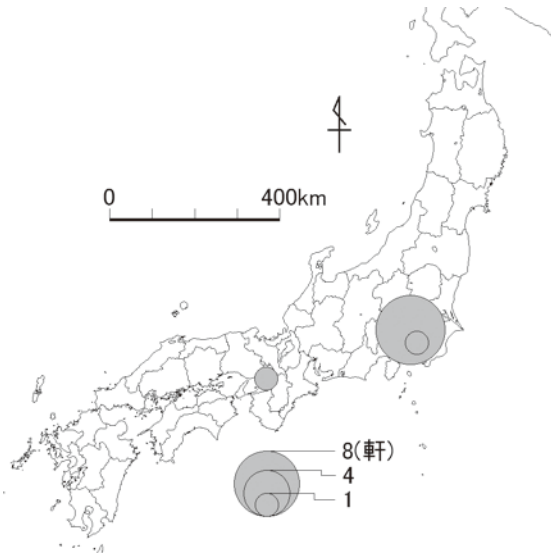


図4 寄席処の機能をもつ寄席の軒数
井澤（2018）より作成

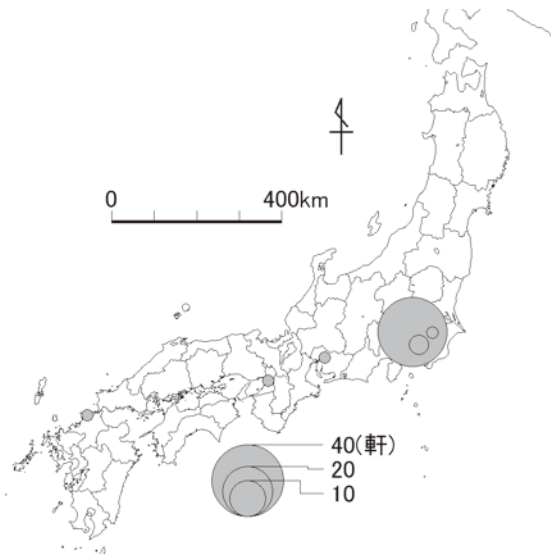


図5 その他の機能をもつ寄席の軒数
井澤（2018）より作成

島市に存在しないことから、仙台市の定席寄席の立地特性は広域中心都市だから立地できることを示すものではない。以上のことから、三大都市圏以外での仙台市の定席寄席の開業の要因を追っていくことにする。

第IV章 定席寄席H座の開業特性

第1節 H座の開業経緯

(1) 定席寄席開業までの道のり

本節では定席寄席の経営責任者であるS氏に聞き取りを実施し、その結果から得られた内容をもとに述べる。仙台市中心部で不動産業を営んでいたS氏は、H座が開業する以前から同市中心商業地の衰退を憂い、以前のような活気を醸し出すための活動を続けていた。S氏はかつて一番町は明治期から東北における文化の発信基地であり、一番町に大衆娯楽の文化が再び根付くことで、仙台市中心部の活性化が図れると考えていた⁷⁾。2007年から同市中心商業地の飲食店で寄席を開始し、2010年から市内で月1回の定期的な寄席の開催を始めた。2011年には同市中心商業地における寄席活動をきっかけに、故桂歌丸⁸⁾から知遇を得て、協会仙台事務所を開設したが、この年発生した東日本大震災により活動が頓挫しかけた。S氏は被災者の「寄席を開いてほしい」という切実な要望に「困難な状況にこそ笑いが必要である」と確信し、岩手県、宮城県、福島県で避難所仮設住宅落語会を継続的に開催してきた。2012年には日本芸能実演家団体協議会東北事務所を開設し、同年からは文化庁事業である学校訪問を年60ヶ所で開催し、伝統芸能文化活動を通じた教育にも力を注いできた⁹⁾。2014年から山形市10回、岩手県花巻市4回、福島県相馬市3回、青森県八戸市3回、岩手県盛岡市2回の寄席を開催し、東北各県で落語を通したお笑い文化を発信してきた。S氏の熱心で地道な活動や地域住民に広がる落語ファンの増加が、協会に認められ、2011年に協会仙台事務所を開設したことがきっかけとなり、H座開業に大きく前進していくことになった。

開業資金の集金は一般企業の協賛の他に、個人からクラウドファンディングによる形式が取られた。出資に対して入場券と故桂歌丸のお礼状や仙台市の物産を返礼品にするほか、3万円の出資においてはH座の館内および館外に名入れの提灯を飾る返礼品も用意された。これらのクラウドファンディングは非常に好評を博し、236人の出資者から目標金額の100万円を4.3倍となる432万5千円の協賛を得て、2018年4月にH座が仙台市一番町四丁目に開業した(写真1)。

また、一番町四丁目商店街のみならず、仙台市中心商業地に立地する商店街の全面的なバックアップのもと、三遊亭小遊三、ナイツらをゲストに同市中心商店街で開業パレードが開催された。このH座開業が示す意義として、1) S氏の落語にこだわる熱意と開業に至るまでの地道な活動、2) 仙台市中心商業地に定席寄席開業を望み、同市に笑いを生む施設を要望する多くの人々の存在、3) 地域における熱心で地道な活動が評価され、協会の会員に加盟



写真1 クラウドファンディング協賛者の名前が入った提灯
(2019年12月13日筆者撮影)



写真2 正月番組の公開収録撮影風景
(2019年12月13日筆者撮影)

できたこと、4) 同市中心商業地に活性化をもたらす施設としての期待が中心商店街関係者の協力で結び付いたこと、5) 開業に向けてバックアップする企業や多くの人々の資金面での協力等があげられる。

鑑賞者誘客について大きなウェイトを占める宣伝については、公共交通機関における宣伝は仙台市地下鉄駅のインフォメーションボード、JR 東日本仙石線を利用し、雑誌における宣伝は月刊誌「りらく」、月刊誌「Sスタイル」、月刊誌「仙台 KAPPO」における掲載により行っている。また、メディアにおける情報発信の機会も増えており、2019年12月にH座において公開収録が行われ、2020年1月に地元放送局のTBC東北放送において正月番組と

して東北出身の漫才コンビのお笑いを放映した（写真2）。

正月のテレビ番組は各キー局によって落語や漫才等お笑い番組を放映することが多く、それを家族や親戚一同そろってテレビ鑑賞をする機会が多い。これまで東北の娯楽施設において正月番組を収録されることは極めて少なかった。そのためH座において正月番組の公開収録が行われたことは、仙台市中心商店街のみならず、宮城県内にお笑い文化が発信される初めての事例であり、H座は東北の情報発信機能を有している施設でもある。

(2) 出演する落語家の配置とローテーション

現在、定席寄席が立地営業可能なのは三大都市圏と宮城県仙台市のH座であることは記述した。しかしこれまで述べた開業に至る経緯では、H座の年間を通じて定席寄席としてお笑い施設を開業する要因とはならない。そこで本節ではH座が協会に加盟していることに着目し、同協会の落語家の派遣配置のパターンを指摘してみる。

一般に落語家は一門に入門すると数年間を指導する師匠の下で前座として修業する。その後、二つ目に昇格し、さらに師匠の下で数年間修業を続ける。各個人によってさまざまであるが、10年間ぐらゐの修業を経て、既定のレベルに達すれば晴れて真打に昇格し、一流の落語家として認められる業界である。そこで協会に加盟する落語家がどのように仙台に派遣配置されるのか、東京・仙台間の移動はどのように行われているのか、身分による差異の有無等を検証する。

S氏への聞き取り調査によれば、一般に真打は東京-仙台間を新幹線利用により移動し、二つ目および前座は、高速バスを利用することであった。東京・仙台間の新幹線乗車時間は、片道1時間20分程度であるため、真打は同日での東京と仙台の高座上演が可能となる。また二つ目と前座も新幹線より交通費が安価な高速バスでの夜間移動が可能になるため、翌日から移動先での上演が可能である。つまり、時間距離を比較的短くできる真打は新幹線利用、新幹線より安価な資金面での移動をせざるを得ない二つ目と前座は高速バスの利用により公演スケジュールを定期的に予定し、H座のスケジュールも組み立てることができるようになったのである。

H座での講演資料と協会の公式ウェブサイトから、2019年11月と12月にH座に出演した落語家の仙台から東京への移動について考察する。H座に出演後、翌日に東京で公演スケジュールが予定されている落語家を見ると、真打4人、二つ目および前座は5人の合計9人であった（表2）。

真打4人の移動特性を分析すると、H座で夜の部終了後に東京へ移動して翌日の東京での午後や夜の公演に出演している。二つ目および前座5人の移動を分析すると、H座の夜の部

表2 2019年11月と12月にH座に出演した落語家の仙台から東京への移動

名前	階級	日付	H座	移動手段	日付	移動先
S・K	真打	11月5日	夜の部終了	新幹線	11月6日	お江戸広小路亭：午後出演
S・R	真打	11月14日	夜の部終了	新幹線	11月15日	国立演芸場：午後出演
K・A	真打	12月5日	夜の部終了	新幹線	12月6日	お江戸広小路亭：午後出演
K・Y	真打	12月15日	夜の部終了	新幹線	12月16日	池袋演芸場：夜の部出演
S・S	二つ目	11月9日	夜の部終了	深夜バス	11月10日	渋谷・ユーロライブ：14:00
K・M	二つ目	11月19日	夜の部終了	深夜バス	11月20日	国立演芸場：午前出演
T・K	二つ目	11月27日	夜の部終了	新幹線	11月27日	東京お江戸日本橋亭：18:00
K・T	二つ目	12月10日	夜の部終了	深夜バス	12月11日	新宿未廣亭：夜の部出演
T・K	前座	11月20日	夜の部終了	深夜バス	11月21日	東京神谷町・別院真福寺2F本堂：18:30

落語芸術協会より作成

表3 2019年11月と12月にH座に出演した落語家の東京から仙台への移動

名前	階級	日付	前日出演場所	移動手段	日付	H座
K・R	真打	12月15日	お江戸広小路亭：12:05~16:35	新幹線	12月16日	夜の部に出演
T・K	二つ目	11月27日	東京お江戸日本橋亭：18:00~20:00	深夜バス	11月28日	昼の部に出演
S・K	前座	11月25日	練馬文化センター：19:00~20:30	深夜バス	11月26日	昼の部に出演
S・Z	前座	11月25日	練馬文化センター：19:00~20:30	深夜バス	11月26日	昼の部に出演

落語芸術協会より作成

出演後高速バスを利用して、東京での夕方からの公演に出演している。

次に同じ期間に東京での公演後に翌日のH座に出演する落語家を取り上げる。この条件に当てはまる落語家は、真打1人、二つ目および前座3人の合計4人であった(表3)。

真打の移動特性を分析すると、東京での夕方の公演後を終えた翌日午前中に新幹線で仙台へ移動し、H座の夜の部に出演している。二つ目および前座の計3人の移動特性を分析すると、東京での夜の公演後に高速バスに乗り込んで夜間移動し、翌朝仙台に到着後H座の昼の部に出演していることが確認できた。

仙台市に定席寄席が営業可能な理由は、移動の利便性がかつての東京・仙台間の交通システムと比べると新幹線利用によって格段に速達性が高まったことや高速バス利用により安価な交通費に抑えられ、身分階級の明確な落語家の移動手段に選択肢が広がったことが大きい。いずれにせよ協会に加盟できたことにより、落語家のローテーション配置が可能になり、首都圏のローテーションに一部組み込まれたことが大きな要因といえる。

第2節 H座鑑賞者特性

東北地方で唯一の人口百万都市である仙台市は来館者の誘客という面では広い集客圏を有していると予想される。そのうち市内居住者、仙台市を除く県内居住者、宮城県外居住者に分けて来館者特性を特定してみる。

(1) 性別および年齢

鑑賞者の男女比は、男性 101 人 (38.5%)、女性 111 人 (42.4%) であり、女性がやや多かった (図 6)。年齢は 20 代以下が 5 人 (1.9%)、30 代が 12 人 (4.6%)、40 代が 37 人 (14.1%)、50 代が 43 人 (16.4%)、60 代が 77 人 (29.4%)、70 代が 64 人 (24.4%)、80 代以上が 21 人 (8%) で 60 代以上が半数を占めた (図 7)。このことから鑑賞者は高齢者に人気の娯楽施設である。

(2) 居住地の分析

「H 座から 3 km 圏内」の鑑賞者は 49 人 (16.8%) で、これを含む「仙台市」の鑑賞者は 167 人 (63.7%) であった (図 8)。「仙台市以外の宮城県内市町村」の鑑賞者は 58 人 (21.4%) であり、「宮城県内」の鑑賞者は 225 人 (85.9%) であった。また、「宮城県外」の鑑賞者は、35 人 (13.4%) であった。このことから、H 座は仙台市に居住する鑑賞者に主に利用される都市型の娯楽施設である。また、仙台市以外の県内他市町村からも来館者がみられる宮城県内に居住する鑑賞者にとって魅力のある娯楽施設である。さらに県外からも落語を楽しむために利用する状況からも主に東北地方で落語を楽しめる娯楽施設であることも伺える。

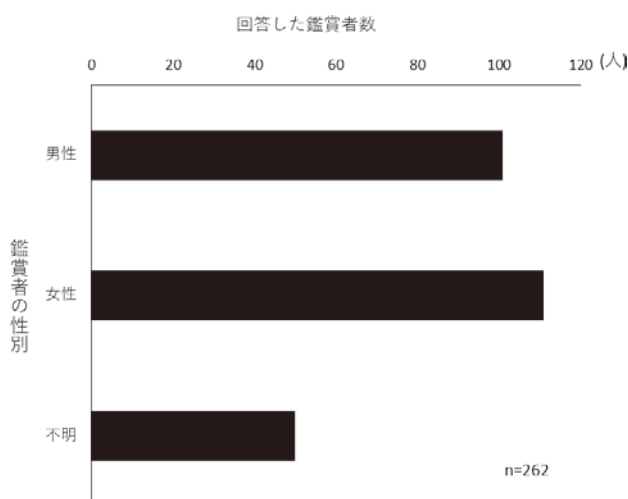


図 6 鑑賞者の性別
鑑賞者へのアンケート調査より作成

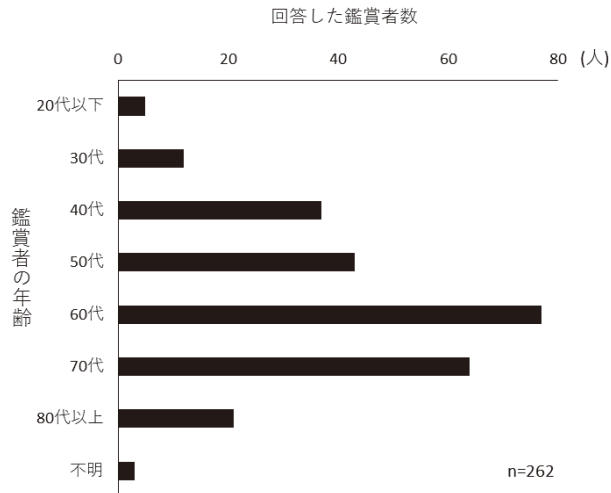


図7 鑑賞者の年齢
鑑賞者へのアンケート調査より作成

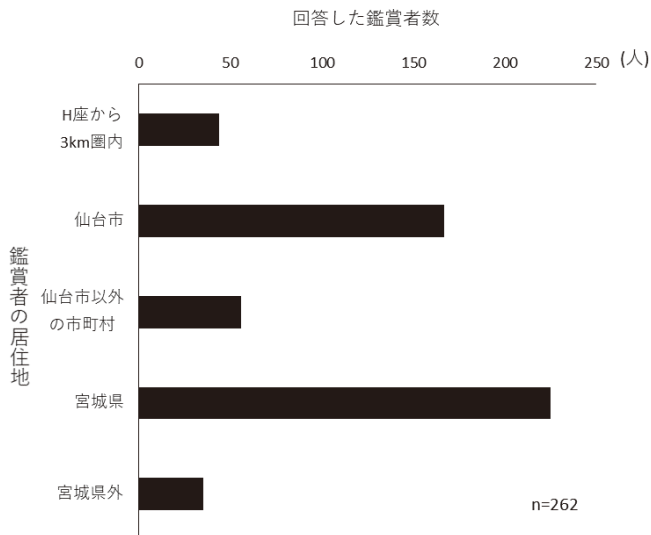


図8 鑑賞者の居住地
鑑賞者へのアンケート調査より作成

第V章 おわりに

明治期から大正期にかけて全国的に芝居小屋や寄席が展開し、なかでも東京が最も立地件数で多く、映画やラジオの普及や戦後のテレビの普及と娯楽の多様化によって一時落語鑑賞施設は衰退した。しかし1990年代の落語家の人間国宝認定や人気落語家の登場、落語家に

よる民放の人気テレビ番組の普及等により 2000 年代に入ると定席寄席での鑑賞が見直されてくるようになった。

そのような折、2018 年に仙台市中心部に開業した定席寄席は三大都市圏以外の立地ということで特筆される。経営者によればこの開業以前から、落語普及活動に意欲的に取り組み、東北各地で落語鑑賞会を開催するなど地道な活動はファン層の拡大に結び付いた。さらにその成果が協会の目に留まり、同協会への加盟が認められ、活動の幅が広がっていった。さらにこのような S 氏の地域に笑いを生み出す地道な活動が、仙台市中心商業地の商店組合や多数の企業からの協力を呼び込み、定席寄席開業につながったといえる。開業資金においては先進的なクラウドファンディングを用いられ地域住民とお笑い文化を作り上げる象徴的な事例となった。

定席寄席としての営業形態を支える要因は、協会加盟により同協会に加盟する落語家のローテーション配置が可能になったことが大きい。東京・仙台間の移動の利便性を活かし東京の公演予定に仙台の公演予定を組み込むことで実現した。真打は新幹線移動、二つ目および前座も高速バス移動により東京・仙台間の連日続けての上演を可能にしている。H 座を利用する鑑賞者の多くは仙台市の居住者であるが、仙台市以外の県内他市町村、一部は宮城県外に居住する鑑賞者も見られた。なおアンケート調査結果に基づく都市中心部での鑑賞前後の鑑賞者の考察等は、別稿で述べる。

謝 辞

最後になりましたが、本稿を作成するにあたり懇切丁寧に御指導いただいた本学教養学部の教授の岩動志乃夫先生をはじめ、地域構想学科の諸先生方に心より御礼申し上げます。本調査にあたり、アンケート調査、聞き取り調査に多大なご協力をいただいた H 座席亭 S 氏に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 定席寄席として 2018 年 4 月 1 日、仙台市一番町に S 氏により開業した。
- 2) 公益社団法人落語芸術協会 URL: <http://www.geikyo.com/lite/schedule/> (最終閲覧日: 2020 年 1 月 15 日)
- 3) 日本テレビが放映する日曜日夕方の「笑点」は視聴率が高率であることで知られる。
- 4) 策伝の面白い説教は『醒睡笑』にまとめられていて現在までに伝えられている。
- 5) 路上で笑い話を披露し、日銭を得る現在のストリートパフォーマンスのようだったとされている。

- 6) 東京都の5件は「浅草演芸ホール」, 「池袋演芸場」, 「新宿末廣亭」, 「鈴木演芸場」, 「国立演芸場」である。大阪市は「天満天神繁昌亭」である。名古屋市は「大須演芸場」である。神戸市は「喜楽館」である。
- 7) 2019年11月, S氏への聞き取りによる。
- 8) 2011年当時, 落語芸術協会会長であった。H座名誉館長でもある。
- 9) 2019年11月, S氏への聞き取りによる。

文献

- 井澤豊一郎 (2018): 『ゼロから分かる! 図解落語入門』. 株式会社世界文化社, 191頁.
- 井上 宏 (2006): 笑いと心のゆとり. 笑い学研究, 13, 71-84.
- 木村洋二 (1989): 『笑いの社会学』. 世界思想社, 201頁.
- 笹川陽子 (2004): 日本における高齢者の都心回帰とモビリティ. 那須大学論叢, 5, 135-154.
- 佐藤友美 (2019): 『ふらりと寄席に行ってみよう』. 辰巳出版株式会社, 143頁.
- 鈴木征男 (1996): 豊かな時代の高齢者マーケティング戦略. 開発工学, 15, 22-9.
- 橘 左近 (2007): 『落語 知れば知るほど』. 実業之日本社, 268頁.
- 内閣府 (2019): 『令和元年版高齢社会白書 (全体版)』
- 中島英雄 (2008): 笑いのメカニズムについての一考察. 笑い学研究, 15, 203-204.
- 中鉢奈津子 (1998): 京都市における高齢者の外出行動. 人文地理, 50, 172-187.
- 広瀬和生 (2020): 『21世紀落語史～すべては志ん朝の死から始まった～』. 光文社, 384頁.
- 三浦 展 (2015): 『昭和「娯楽の殿堂」の時代』. 柏書房株式会社, 174頁.
- 山本恒夫 (1978): 『庶民娯楽の面白さ』. 学文社, 198頁.